

【 15 】

氏 名	松 尾 博 まつ お ひろし
学 位 の 種 類	経 済 学 博 士
学 位 記 番 号	論 経 博 第 17 号
学位授与の日付	昭 和 42 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	ヴェブレンの人と思想 —アメリカ経済思想史の一断面—

論文調査委員 (主 査) 教授 出口 勇 蔵 教授 大野 英二 教授 山本安次郎

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ヴェブレンをもってアメリカ制度学派の創始者とする通説に疑問を投げかけ、彼の思想的地位にかんしてそれと異なる規定を与えることを目的とする。

まず、Ⅰ ヴェブレンの生涯において、彼の時代と人となりをうかがったのち、Ⅱ ヴェブレンの経済思想において、彼の (1)経済学方法論 (2)古典学派批判 (3)マルクス主義批判 (4)資本主義体制論 (5)景気論 (6)日本帝国主義批判 (7)技術者革命論を取上げ、ヴェブレン経済思想の基本的性格を究明する。

最後に、Ⅲ ヴェブレンの思想史的地位においては、改良主義的な制度学派と資本主義体制にたいする鋭い批判者たるヴェブレンとの相異点を論究しながら通説を批判し、ヴェブレンを「真の社会主義的立場のほんの一步手前まで到達していた良心的な急進的社会思想家」であったと規定して、アメリカ経済思想史上におけるその独自の位置を明らかにする。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

Thornstein Veblen (1857—1929) は、死後において、アメリカの「ニューディール政策」の時代に学界の注目をあび、また第2次世界大戦ののちにおいて、世人の研究意欲をかき立てているようにみえる。

日本においては、これまでヴェブレン研究はアメリカ風の社会評論にたずさわる人のほかには、経済学者によってあまり行なわれなかったものであるが、最近において、小原敬士教授や中山大氏によって研究の成果が発表されるにいたっている。この論文もこれらの経済思想史的研究に互して、その独自性を主張しようとするものである。

著者の研究の結果えられたヴェブレン像は「真の社会主義的立場のほんの一步手前まで到達していた良心的な急進社会思想家」とすることにある。これは一方で、ヴェブレンをいわゆる制度主義的経済学者の一人だとし、保守的な改良主義者と考える通説にしたがう Dorfmann や Gruchy に対立すると同時に、他方では、Sweezy のように、ヴェブレンをマルクス主義者と異ならぬ者とする見解ともちがった立場で

ある。

この結論にみちびかれるまでの研究過程をしめすものとして、著者がまず語るのは、不幸な大学人としての生涯をおくり、社会にたいして終始皮肉な目をむけていた人間ヴェブレンである。つぎに経済思想として、方法論、古典学派批判、マルクス主義論、資本主義体制論、景気論、日本帝国主義批判および技術者革命論の7項目に分けて、詳しく論述している。そして、ヴェブレンが私有財産制度を資本主義の基本的条件であるとしてそれを批判し、独占資本主義が帝国主義的侵掠にいたらなくてはならぬ訳を明らかにして、それを弾劾し、進化論にもとづく歴史観をとるヴェブレンが経済体制の変革にたいして積極的に貢献する人間主体として、技術者をえらび出していることを、詳論している。著者によれば、ヴェブレンがマルクス主義者とことなる点は、社会変革の行動主体としてプロレタリアートを考えることをしなかった点にある、というのである。

著者の論旨の証明は必ずしも十分に行なわれているとはいえない。たとえば、ヴェブレンにみられるところの、産業 (industry) と企業 (business enterprise) との区別について、著者が理解するところがその一例である。一方を物質的環境、他方を制度とみなして、近代的な機械過程 (machine process) は非利己主義的な社会連帯の自覚を生み、それが企業原因あるいは財産の原理と矛盾すると説く。けれどもこの対立については、一層の分析を加えることが望ましいと思える。また著者はヴェブレンがいまい少しでマルクス主義の意味での社会主義の思想に近づくというけれども、その意味は必ずしも明瞭であるとはいいがたい。

このように、この論文には欠陥と考えられる部分はあるけれども、これまで、内容の紹介程度を出ることがほとんどなかったヴェブレン研究に比べて、独創的な見解を立てようと努力しており、且つ独自の見解を樹てている功績は明らかである。難解をもって鳴るヴェブレンの議論をとき明かし、平明な叙述でもって明セキなヴェブレン像を与えていることも、この論文の長所であるといえる。

以上によって、われわれはこの論文が経済学博士の学位にあたいするものと判定する。